# 惜別 9教授

長年、学生の指導と研究に情熱を注いでこられた9人の先生方が定年で教壇を去る。本学の思い出や学生へのメッセージを8人の先生方からいただいた。

**定年退職**

▽市岡修経済学部教授▽小沼堅司法学部教授▽木幡文徳同教授▽広渡清吾同教授▽鈴木泰文学部教授▽仲川恭司同教授▽樋口淳同教授▽中村友保ネットワーク情報学部教授▽武知政芳法科大学院教授

市岡修経済学部教授
※在職18年。主な担当は「公共経済学」

**依願退職**

3月31日付
ライアン，スティーブン経済学部教授（在職6年）
伊藤萬里経済学部准教授（在職7年）
田村理法学部教授（在職12年）

## 全員無事の遭難事故　多忙な学内職…

法学部教授　小沼　堅司

専修大学に奉職して40年、やっと定年退職を迎えた。

40年も、となるとさまざまなことが思い起こされる。

十数年前、あるクラブの部長をしていたとき、遭難事故があった。ほとんど絶望的であったが、奇跡的に天候が回復して救出ヘリで全員無事救出された。

収容された病院の病室からは夕日に染まった神々しい山嶺が残酷なほど美しかった。時々思うことがある――もし助かっていなかったら大学を辞めていたことだろう、と。

次は苦々しい思い出。私は50歳代の元気が出る時期、法学部長・理事、21世紀構想会議委員長、法科大学院設置委員会委員長などの管理行政職で忙殺され「歌を忘れたカナリア」となってしまった。

だが「後の山に捨てられる」ことも、「舌を切られる」こともなかった。その後、必死で歌を歌い、学位論文その他の著書を書いた。愚かなことであった。

※在職40年。主な担当は「近代西洋政治思想史」

## すべての専修人よ　よりアクティヴに

法学部教授　木幡　文徳

私は、法学部学生から始まり、大学院生を経て、教員（助手・専任講師・助教授・教授）として歩んできたため、「専修人」としてはそのほとんどを、教育・研究を目的とする大学の直接の現場で過ごしてきたことになる。

かくも長き年月を、同一の共同体で活動できたことは、学生・教職員の皆さんとの協力関係の形成がなくてはありえないことであり、まずは関係者に感謝の意を表したい。

ところで、専修大学の総合力は、本来、直接には学生、教員の業績によって測られるものではあろうが、実は、卒業生のキャリアに対する社会による地道な評価、大学の示す具体的施策によるところが大きい。

このことをいまさらながらではあるが、すべての「専修人」の皆さんとともに認識しておきたい。

そこで、やや陳腐ではあるが「専修人よ、よりアクティヴたれ」。

これをもって敢えて私からの檄（げき）としたい。

※在職43年11カ月。主な担当は「親族法相続法」

## 「社会知性」掲げる専大の今後に期待

法学部教授　広渡　清吾

専修大学には63歳から70歳まで7年間、大学教師としての「晩年」にお世話になりました。

一宿一飯の恩義すらおかえしできずに、定年退職に至り、慙愧（ざんき）にたえません。

専修大学は2020年に創立140周年を迎えます。

21世紀は、「大学受難」の時代です。この時代を乗り切るためには、大学の個性、つまり大学の固有の理念（建学の理念）をしっかりもって、教師集団と学生のみなさん、そして職員集団が「この大学をもっといい大学にする」ために協働することが肝要です。

「社会知性」は、考えれば考えるほど、含蓄のあるコンセプトではないかと思ってきました。社会科学の歴史をたどると、「社会」に対する知的アプローチは、その批判的性格が本質的なものでした。「反知性主義」が大手を振る昨今であればこそ、ますます専修大学のこれからに期待します。

※在籍7年。主な担当は「ヨーロッパ大陸法」

## スマホに頼らずに話し言葉きたえよう

文学部教授　鈴木　泰

今、日本語は国境を越えて広がっているが、ある一定以上の広がりはない。

その理由は、話し言葉として日本語が十分きたえられておらず、書き言葉に依存しているからである。これは日本人が言葉を漢字でどう書くかで説明することによく現れている。

また、英語で外国人と渡りあうようなとき日本人はおしまくられっぱなしになることがある。

これは日ごろ日本語で話すとき、話し言葉で相手とちゃんと渡りあうことを避けているからだ。言葉に不安があっても、すぐスマホに頼って視覚化することに逃げず、話し言葉だけで伝えるのだという気概がほしい。

そのためには話し言葉をきたえる必要がある。それは、国に任せておかなくてもできる。

自分の話し言葉をよく点検して、分かりやすい言葉に置きかえていくことだ。一人一人の努力が集まれば、日本の話し言葉は真に頼りがいのあるものに変わっていくだろう。

※在職6年。主な担当は「日本語の文字・表記」

## 中国の磨崖碑見て書道にのめり込む

文学部教授　仲川　恭司

私が専大の教員になって間もなく、大学（生田キャンパス）に初めて本格的な書道室が設けられた。

春から夏、外から鶯（うぐいす）やホトトギスの啼（な）き声が響いてくる。そうした中で授業をしたり、筆を執るなど至福の時間を過ごした。ところが東日本大震災で一変する。2号館の建物は至る所にヒビが入り、授業はしばらく非常口のドアを開け放しにして行っていた。

2年後、新たな書道室ができてホッと胸を撫（な）で下ろした。広さはひとまわり狭いがそれでもありがたかった。

私が高校1年の時に中国の磨崖碑（がいひ）の本を見て、衝撃を受け、書道にのめり込んだ。結局その本で書道が私のライフワークになり、今日まで続いている。さあ、あなたはどのような人生を歩むのだろうか。

※在職34年。主な担当は「書道」

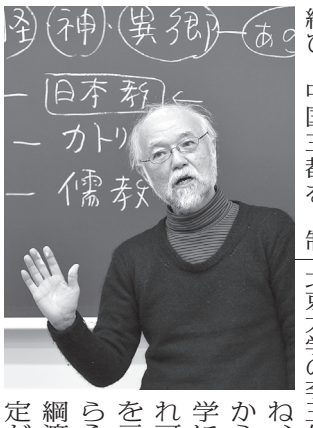
最終講義で「感謝」を揮毫

## 続く各国との交流　学生は踏み出そう

文学部教授　樋口　淳

1975年にベルギーから帰国し、専修大学の教壇に立ちました。まだ若くて、何ができるか迷いましたが、民話を選び、その後ずっと民話の勉強を続けることになりました。いつも学生諸君に助けられてきたと思います。

授業のほかには、国際交流センターの仕事がよい思い出です。当時の余村部長、松木課長に率いられた最強チームに助けられ、上海に続き西安（西北）、北京と協定を結び、中国三都を〝制覇〟することができました。とくに北京は、センターを離れた後、私的に北京大学の李玉先生を訪ね、北京側から専修大学に受け入れ可能な案を示してもらうという綱渡りの協定が実現しました。



ほかにもフランス語研修やリヨン大学との協定など、職員の皆さんの助けがなければ実現できませんでした。学生諸君にも、センターの強力なサポート力を生かして、世界に一歩踏み出してほしいと願っています。

※在職41年。主な担当は「東西文化論」

## 「コウサ展」に見る新鮮な発想・想像力

ネットワーク情報学部教授　中村　友保

今は「もう、そんな年になったの!?」というのが正直なところです。はじめの22年間は商学部の、そして後の15年間はネットワーク情報学部の学生たちと、勉学以外（そのほうが多かったかも?）にもたくさんの思い出を残すことができました。

専大に入職したばかりの頃、私と学生との年齢差は10歳前後で、少々年上の兄貴のようでした。定年の年に担当した学生は孫の世代です。そのようなわけで、さまざまな学生たちと出会いました。商学部教員だった時のゼミ合宿、打ち上げの飲み会、花火大会、10年ごと（?）に開いたゼミOB・OG会の思い出は生涯忘れないでしょう。

ネットワーク情報学部では、「ゼミ」ではなくプロジェクト、卒業制作が活動の中心でした。毎年のプロジェクト発表会、あるいは第1期生が始めた「コウサ展」で見る学生たちの新鮮な発想、創作力に感激しました。楽しい37年間でした。

※在職37年。主な担当は「情報商品」

## 懐かしのセミナーハウスでゼミ合宿

法科大学院教授　武知　政芳

高原キャベツで有名な群馬県嬬恋村。数年前に閉鎖された専大の嬬恋セミナーハウスは、近くに多数のスポーツ施設・温泉があり、国有林に囲まれた環境と設備は非の打ちどころのないもので、夏期ゼミ合宿に毎年利用していた。宿舎には、車に分乗して浅間山の中腹を通る鬼押ハイウエー経由で行っていた。

2005年、前年秋に浅間山に中噴火があり東山麓に位置する嬬恋村にも降灰があった。直前の7月に噴火の可能性は低いが注意は必要と報じられ、合宿中止の判断を決意し、大学に相談したところ、教員の判断に任せるとのことで、中止に納得しないゼミ生との間で苦悩した。

合宿は例年通り行い、噴火はなく楽しいものとなった。ただ、御嶽山噴火など火山事故の惨事を思えば、合宿敢行は「無謀な決断」であったとの反省を禁じ得ない。

※在職16年。主な担当は「商法Ⅱ（決済システム・企業取引）」